

A. nidus L.—Near Wat Chieng Daw, Chieng Daw (cultivated) (T57395).

A. normale D. Don—Mt. Phou San, N of Ban Hang, NE of Phongsavanh (L57640).

A. prolongatum Hook.—Mt. Phou San, 12 km N of Ban Hang, NE of Phongsavanh (L57204).

VITTARIACEAE

Vittaria flexuosa Fée—Muong Khu—Hoet That (OCUBE-218-67; 218-72); Hoet That—Wang Thao (OCUBE-219-27).

* * * *

津山尚氏が 1957-58 年にタイとラオスで単独で採集されたシダと、同じ年タイで大阪市立大学東南アジア学術調査隊（小川房人・依田恭二両氏）に同行して採集されたシダとを見せていただいた。それらのうちヒメシダ科のものはすでに岩槻邦男氏が検定して、本誌 38: 313-315 (1963) に発表しておられるので、このたびは残りの全部について報告する。

□河野昭一：種の分化と適応 三省堂，4,700 円。「植物の進化生物学」の第二巻として出版された本書は、「種の分化と適応」の諸問題に関して日本の研究者が本格的に展開した最初のものである。類書に見られないすぐれた特色の一つは、可塑的変異とヘテロプラスティックな発生をとりあげた第 3 章にある。環境の変化に対応した形質の発現を、遺伝的制御機構の働きによる個体発生における誘導という観点でとらえることが提唱されている。このことは一般論としては既に常識であるが、分類学の方野ではそうとは言えない。また、Durrant, Highkin らによる conditioning の例を紹介しつつ、環境条件が、ある条件下では後世代の形質に反映する可能性を強調している部分は、高等植物における遺伝性について更に深い理解が必要であることを示唆していると言えよう。これらの点は、ある意味では適応の本質や種の地理的変異の問題を解明するカギをにぎっている可能性すらあるのである。

第二に特徴的なのは、「種の問題の生態的アプローチ」と題した第 5 章である。種のもつ生活様式、とくに種の再生産システムの面から種レベルの法則、さらには種分化の歴史的過程と背景をよみとろうとする試みは独創的である。これまで、ともすれば種を分ける目的で新しい方法を応用したり、集団遺伝学の理論を単純に適用することにとどまりがちであったが、こうした傾向を排した本書の登場は、正に分類学が内包してきた種に関する様々な問題意識を発展させる一つの学問分野として進化生物学が確立し、他の分野に対しても積極的に貢献しうる段階に到達したことを象徴していると言っても言いすぎでない。

(森田龍義)